

梅花歌の序

※ 万葉集 全訳注原文付 (二) 中西進 著 講談社文庫

うめのはな うた あは じよ
梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に、帥の老の宅に萃まりて、宴會を申く。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

加^{しか}以^{のみにあらず}、曙^{あさけ}の嶺^{みね}に雲移り、松は羅^{うすもの}を掛けて蓋^{きぬがさ}を傾く、夕^{ゆふ}の岫^へに霧結び、

鳥^{うすもの}は穀^こに封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空に故雁歸る。

ここに、天を蓋^{きぬがさ}にとし、地を坐とし、膝を促^{ちかづ}け觴^{さかづき}を飛ばす。

言^{こと}を一室^{うち}の裏に忘れ、衿^{えり}を煙霞の外に開く。淡然^{たんぜん}と自ら放^{みづか}にし、快然^{みづか}と自ら足る。

若^{かんあん}し翰苑^{かんえん}にあらずは、何を以^もちてか情^{こころ}を攄^のべむ。詩に落梅の篇^{しる}を紀す。

古^{いにしへ}と今^{いま}とそれ何^{こと}そ異^{こと}ならむ。宜^{よろ}しく園の梅を賦^ふして聊^{いささ}かに短詠^{たんぎ}を成すべし。

梅花歌世二首并序

天平二年正月十三日、萃干帥老之宅、申宴會也

于時、初春令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。

加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、

鳥封穀而迷林。庭舞新蝶、空歸路鴈。

於是蓋天坐地、促膝飛觴。

忘言一室之裏、開衿煙霞之外。淡然自放、快然自足。

若非翰苑、何以攄情。請紀落梅之篇。

古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。

「梅花宴」

※ 「令和と万葉集」 村田右富美 著 西日本出版社

梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴會を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

加 以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、

鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空に故雁歸る。

ここに、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け觴を飛ばす。

一室の裏に忘言し、煙霞の外に開衿す。淡然として自ら放し、快然として自ら足りぬ。

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を據べむ。詩に落梅の篇を紀す、

古と今と夫れ何か異ならむ。園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

梅花歌世二首并序

天平二年正月十三日、萃干帥老之宅、申宴會也。

于時、初春令月、氣淑風和、梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。

加以、曙嶺移雲、松掛羅而傾蓋、夕岫結霧、

鳥封穀而迷林。庭舞新蝶、空歸路鴈。

於是蓋天坐地、促膝飛觴。

忘言一室之裏、開衿煙霞之外。淡然自放、快然自足。

若非翰苑、何以據情。請紀落梅之篇。

古今夫何異矣。宜賦園梅聊成短詠。

蘭亭序

王羲之（字・逸少）

永和九年、歲癸丑に在り。

暮春の初、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を修むるなり。群賢畢く至り、少長咸集まる。

此の地に嵩山峻嶺、茂林修竹有り、又清流激湍有りて、左右に映帶す。引きて以ちて流觴の曲水と為し、其の次に列座す。

玆竹管弦の盛無しと雖も、一觴一詠、亦以ちて幽情を暢叙するに足る。

其の日や、天朗かに氣清く、惠風和暢せり。仰ぎて宇宙の大を觀、俯して品類の盛なるを察る。

目を遊ばしめ懷を聘する所以、以ちて視聽の娛みを極むるに足れり。信に樂しむべきなり。

夫れ人の相与に一世に俯仰するや、或は諸を懷抱に取りて、一室の内に悟言し、

或は託するに所に因寄して、形骸の外に放浪す。趣舍万殊にして、静躁同じからずと雖も、其の遇ふ所を欣びて、

暫く己に得るに当りては、快然として自ら足り、老の將に至らむとするを知らず。其の之く所既に倦み、

情事に随ひて遷るに及びては、感慨之に係れり。向の欣ぶ所は、俛仰の間に、以に陳跡と為る。

尤も之を以て懷ひを興さざる能はず。況や修短化に随ひて、終ひに尽くるに期するをや。

古人云ふ、生死も亦大なりと。豈痛ましからずや。

昔人感を興すの由を覽る毎に、一契を合せたるが若し。未だ嘗て文に臨みて嗟悼せざるにあらず。之を懷に喩ること能はず。

固より死生をいっにするは虚誕きよたんにして、彭殤ほうしょうを齊ひとしくするは妄作ぼうさたるを知る。

後の今を視るも、亦猶またなほ今の昔を視るがごとくならむ。悲しきかも。

故に時人じじんを列叙れつじよして、其の述ぶる所を録ろくす。世殊よことに事異ことことなると雖も、懷おもひを興おこす所以ゆゑは、其の致ちいつ一なり。

後の覽みむ者も、亦將まさに其の文に感有かんあらむとす。

蘭亭序 王羲之（字・逸少）

永和九年、歳在癸丑。

暮春之初、会于稽山陰之蘭亭。修禊事也。群賢畢至、少長咸集。

此地有嵩山峻嶺茂林修竹、又有清流激湍、映帶左右。引以為流觴曲水、列座其次。

雖無玆竹管弦之盛、一觴一詠、亦足以暢叙幽情。

其日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛。

所以遊目騁懷、足以極視聽之娛。信可樂也。

夫人之相与、俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之内、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍万殊、静躁不同、当其欣於所遇、

暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情随事遷、

感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、以為陳跡。

尤不能不以之興懷。況修短隨化、終期於尽。

古人云、死生亦大矣。豈不痛哉。

每覽昔人興感之由、若合一契、未嘗不臨文嗟悼、不能喻之於懷。

固知一死生為虚誕、齊彭殤為妄作、後之視今、亦猶今之視昔、悲夫。

故列叙時人、錄其所述。雖世殊事異、所以興懷、其致一也。

後之覽者、亦將有感於訴文。

帰田賦

張衡（字・平子）

都邑に遊びて以て永久になるも、明略の以て時を佐くる無し。

徒に川に臨みて以て魚を羨み、河の清むことを俟てど未だ期あらず。

蔡子の慷慨に感じ、唐生に従ひて以て疑ひを決せり。天道の微昧なるを諒とし、漁夫を追ひて以て嬉びを同じする。

埃塵を超えて以て遅く遊び、世事と長く辞す。

是に仲春の令月にして、時和し氣清し。原隰鬱茂し、百草滋榮す。王雎翼を鼓し、鶉鷃哀しみ鳴く。

頸を交へて頤頤し、関関嚶嚶たり。

焉に逍遙し、聊か以て情を娛しましむ。尔して、乃ち竜のごとく方沢に吟じ、虎のごとく山丘に嘯く。

仰ぎては織繳を飛ばし、俯しては長流に釣る。矢に触れて斃れ、餌を貪りて鉤を呑む。

雲間の逸禽を落とし、淵沈の魴鰈を懸く。

時に曜靈は景を俄け、係ぐに望舒を以てす。般遊の至樂を極め、日夕くと雖も劬るるを忘る。

老氏の遺誡に感じ、將に駕を蓬蘆に廻らさむとす。

五絃の妙指を弾じ、周孔の図書を詠ず。翰墨を揮ひて以て藻を奮ひ、三皇の軌模を陳ぶ。

苟くも心を物外に縦にせば、安くにぞ榮辱の如く所を知る。

※ 「令和と万葉集」 村田右富美 著 西日本出版社

歸田賦

張衡（字：平子）

遊都邑以永久、無明略以佐時。徒臨川以羨魚、俟河清乎未期。
感蔡子之慷慨、從唐生以決疑。諒天道之微昧、追漁夫以同嬉。
超埃塵以遐逝、與世事乎長辭。
於是、仲春令月、時和氣清。原隰鬱茂、百草滋榮。王雎鼓翼、鵲鷦哀鳴。
交頸頡頏、閑關嚶嚶。
於焉於逍遙、聊以娛情。尔乃童吟方沢、虎嘯山丘。
仰飛纖繳、俯釣長流。触矢而斃、貧餌吞鉤。
落雲間之逸禽、懸淵沈之魴鰈。
千時曜靈俄景、係以望舒。極般遊之至樂、雖日夕而忘劬。
感老氏之遺誡、將迴駕乎蓬蘆。
彈五絃之妙指、詠周孔之圖書。揮翰墨以奮藻、陳三皇之軌模。
苟縱心於物外、安知榮辱之所如。

※ 「令和と万葉集」 村田右富美 著 西日本出版社

「梅花歌の序」のオリジナリティ

「令和と万葉集」 村田右富美 著 西日本出版社

天平二年正月十三日に、帥老の宅に萃まりて、宴會を申ぶ。.....「蘭亭序」

時に、初春の令月にして、氣淑く風和ぐ。.....「帰田賦」、「塘上行」

梅は鏡前の粉を抜き、.....「梅花賦」「梅花落」？

蘭は珮後の香を薫らす。.....「離騷」

しかのみにあらず
加以、

曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾く、.....「疑都賦」、「神女賦」

夕の岫に霧結び、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。.....「神女賦」

庭に新蝶舞ひ、.....「湘東王の春日に和す」

空に故雁歸る。.....「湘東王の春日に和す」

ここに、

天を蓋にし地を坐にし、.....「酒徳頌」、「淮南子」

膝を促け觴を飛ばす。.....「抱朴子」

一室の裏に忘言し、

「蘭亭序」

煙霞の外に開衿す。

淡然に自ら放し、

快然に自ら足りぬ。

「蘭亭序」

もし翰苑にあらずは、何を以てか情を據べむ。

「秋日群公と宴する序」

詩に落梅の篇を紀す、古と今と夫れ何か異ならむ。

「古楽府」

園梅を賦して、聊かに短詠すべし。